杉本豊久先生と英語教科書『NEW CROWN』

田　村　優　光

杉本先生、ご退官おめでとうございます。そしてまた、長い間たいへんお疲れ様でした。この間、先生のご専門の分野を生かして、三省堂の中学校英語教科書『NEW CROWN』にご参画いただきましたことは、『NEW CROWN』の編集方針をさらに高い位置に継承・発展させる意味におきまして、たいへん影響を与えていただくこととなりました。

『NEW CROWN』という教科書は、三省堂が昭和53年に初版を発行した中学生向けの英語の教科書です。それまでに発行されていた教科書を分析して、日本の生徒にとって一体どのような英語の教科書がこれからは必要なのかということについて徹底的に議論を重ねて刊行されました。

「ことばの教育」「異文化理解教育」「人間教育」を編集方針の柱として作られました。英語の教科書の中心は題材であるという基本的な考え方のもとに議論がなされましたが、『NEW CROWN』が世に出るまでの他の様々な教科書では、題材の中心はアメリカとイギリスの話題だけでした。「国際理解」とは言っても、実際には「英米理解」だったわけです。そのような状況の中、『NEW CROWN』では、場面を英米のみならず、英語圏の国々にまで広げました。そしてさらに、教科教育という観点から「ことば」に関する題材を意識的に配置したのです。

その一つが、今でも『NEW CROWN』の歴史の一つとなっていますケニアを扱った題材です。そこでは、登場人物としてKimaniとMukamiと

いう二人の中学生が登場して、母語としての Kikuyu 語と周囲の民族との共通語としての Swahili 語、そして公用語としての English を使うことができる、というような題材を扱いました。３つの言語を使うことができるという題材は、ほとんど日常的には日本語しか使うことのない日本の生徒たちにとって、とても新鮮だったようです。英語の題材としてケニアの国を取り上げることは、今では国際理解の観点から見ましても誰も異論を唱える人はいないと思いますが、当時は英語の教科書にアメリカ、イギリス以外の国が扱われること自体おかしく思っていた先生方も多く、ましてや、どうして英語の教科書なのにアフリカのケニアを扱わなくてはいけないのかという問い合わせを、当時編集部には数多くいただくことになりました。それも考えてみますと無理もないことです。当時の先生方は、先生方ご自身が学生時代の時にはほとんど英米だけの題材を通して英語を学習してきていたのですから。

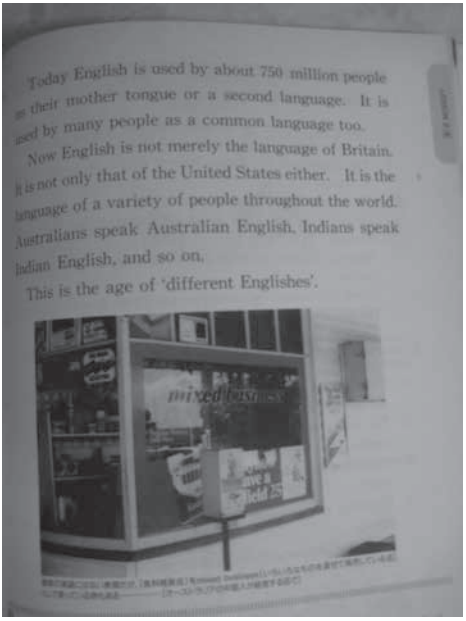
また、もう一つの編集方針の柱になっている「ことばの教育」のテーマの一つとして取り上げましたのが、マレーシアにおける Language War（言語戦争）というテーマです。使用言語を何語にするのかということで民族同士の争いにまでなってしまうという、これも日本ではなかなか意識することのない題材でした。このように『NEW CROWN』では、今までの教科書では扱ったことのない、「言語教育としての英語教育」という観点からのアプローチを積極的に取り上げてきていました。

初版の昭和 53 年以来このような編集方針のもとで改訂を重ねていました昭和 62 年に、いよいよ杉本先生がこの『NEW CROWN』に参加していただくことになります。当時の教科書の著者の先生方は、ほとんどが英語科教育のご専門の先生方でしたので、ご専門が「社会言語学」というあまり英語教育には関係がないと思われている分野から杉本先生に参加していただきましたことは、それ以降の『NEW CROWN』がさらに新しい道を

目指して飛躍していくためにも必要かつ重要な判断でした。

特に、ご専門の領域である、言語接触によって生まれる「ピジン言語」、そしてその言語が現地の人たちに定着して母語として話されるようになった「クレオール言語」でのご研究を、中学生にもわかるような形でやさしく紹介していただきました。今やまさに Variety of English の時代になっているわけですが、その先駆けとしてすでに『NEW CROWN』では、約 30 年前に杉本先生のご専門を通して、言語接触による言語の多様性について取り上げていただいていたことになります。

当時、私は『NEW CROWN』編集部の一編集者でしたが、杉本先生が提出されたその他の題材として記憶に残っているものに、長崎の平和記念公園にある「平和祈念像」について記述した内容のものがありました。この平和祈念像は、「天を指さす右手は原爆の恐ろしさを、水平に伸ばした左手は平和を願う気持ちを表し、目を軽く閉じた顔の表情は戦争の犠牲者の冥福を祈っている。」という趣旨の文章を提案されましたことを今でも覚えています。この文章は最終的には教科書には掲載されませんでしたが、記憶にしっかりと残る文章でした。



「食料雑貨店」の意味で使われている mixed business の看板（『NEW CROWN』掲載）杉本先生撮影

また、数多く行われた編集会

議の場におきましては、杉本先生の明るく、周りの人をリラックスさせてくれるご性格とそのお人柄は、議論で息詰まったような会議の場においても、また、アイデアが出なくて沈黙が続くような状況の中でも、その場の雰囲気を和ませてくれました。改めまして、感謝申し上げます。

それから、実際にはどうであったかは定かではありませんが、会議の終わった後での懇親会における先生ご自身のお話から察しますと、卓球もかなりの腕前であったように思われます。外見からしますと、それほど敏捷性に優れているようにはお見受けできませんでしたが、ひとつの驚きでした。

それからまた、突然に、ある飲料水メーカーの紅茶の CM に出ることになったことを話された時も、編集部・著者含めて皆驚いたものでした。英語教育一筋のようなやや固めの先生方が多い中で、テレビの CM に出演されたのは、後にも先にも杉本先生以外はいないのではないでしょうか。このことも忘れることができない出来事でした。

実際にこの CM を私も拝見しましたが、さすがに、プロの CM プロデューサーです。杉本先生の個性、特長を十二分に生かした演出になっていました。内容はテレビの英会話の番組の形式で展開されるのですが、隣にいる相手役の女性との掛け合いで話は進みます。いくつかあるバージョンの一つですが、そのアシスタントの女性が「形容詞 happy」と書かれたカードを持って、happy の比較変化を happy-happier-happiest と発音します。これを受けて杉本先生がその解説をするわけですが、この変化を、「happy の y を i に変えるところが happy ですね。もう愛（i）に変わりましたか？」と隣の女性に尋ねますが、女性は首を横に振り、先生は少しがっかりした様子。するとバックから、「それでは良い紅茶を・・・」と音声が流れます。まさに大学教授らしいアカデミックな雰囲気と、なぜか穏やかな温かみのある、見ている人をホットした気持ちにさせる先生のご容貌とが重なり

合って、何とも言えない楽しい CM になっていました。

今後ますますグローバル化が加速して進んでいく中で、杉本先生が研究されてきました「現代英語の多様性」という分野は、社会と民族、民族と言語を考える上でとても重要なテーマとなってきています。国の政策としても、また一民族としても「ことば」というものをどのように考えていくか、民族語としての言語が、これからも避けては通れない言語接触という力の中で、将来的に今後どのような変化をし、どのような進化を遂げていくのか。おそらく、今までも気の遠くなるような長い時間をかけて形成されてきた今の「ことば」ではありますが、民族にとっては、その民族の「ことば」はまさに Language is the life of the people that use it. です。杉本先生におかれましては、この分野のご研究に多大な功績を残されたと同時に、これからも可能な限りこの分野の研究を後世の研究者に伝えていくためにも、ますますのご活躍を願っております。

最後に、三省堂の英語教科書『NEW CROWN』の継承・発展に寄与していただいた杉本豊久先生の多大なるご功績をお称えするとともに、『NEW CROWN』編集部を代表して、お礼の言葉を書かせていただきました。